

シュラーズ教授との会合の結果概要

1. 評価・助言者

(1) 氏名

ミランダ・シュラーズ教授

(2) 所属・役職

ベルリン自由大学 比較政治学教授、環境政策研究センター 所長

(3) 略歴

博士（比較政治学、ミシガン大学）

准教授（メリーランド大学 政府政治学科）

客員教授（日本、ノルウェーの複数の大学）

ドイツ環境審議会、ドイツ安全エネルギー供給倫理委員会 委員

ベルリン気候変動審議会 委員

ハーバード大学等多くの大学で研究・教育経験を有する

(4) 専門分野

比較政治学、環境ガバナンス、気候変動政策および政治学

2. 会合の概要

(1) 日時

2012年11月21日（水）

(2) 場所

特別会議室（国立環境研究所）

(3) 参加者（敬称略）

ミランダ・シュラーズ教授

大垣眞一郎（理事長）

住 明正（理事）

鏑木儀郎（理事）

村上正吾（審議役）

清水英幸（企画部国際室長）

（以下、社会環境システム研究センター所属）

原澤英夫（センター長）

亀山康子（持続可能社会システム研究室長）

青柳みどり（環境計画研究室長）

松橋啓介（環境都市システム研究室主任研究員）

(4) 進め方

まず、大垣理事長が研究所の全体概要を説明し、意見交換の際の手引きとして以下の3つの大きな論点を示しました。

(A) 自らの専門分野から見た国環研の研究の特徴

(B) 環境に係る研究機関としての国環研の特徴および期待する点

(C) 国環研において今後推進強化していくべきと考えられる点

その後、シュラーズ教授には、自身の専門分野および関心と特に関連性の高い3研究センター（社会環境システム研究センター、生物・生態系環境研究センター、環境リスク研究センター）を訪問頂き、各研究センターにおいて、現場の研究者から説明を受けると共に、研究設備等の見学並びに研究者との自由な意見交換を行いました。その後、これらの情報をもとにシュラーズ教授が大垣理事長に対してコメントを述べ（以下参照）、広く意見交換を行いました。

3. シュラーズ教授のコメント

(1) 国環研の最大の特徴は幅広い分野の環境研究を行っている点にある

本日国環研での視察を終え、実施している研究分野の多様さという面から、環境研究に携わっている研究所の中で、国環研は世界規模で見てもユニークかもしれない、という強い印象を受けました。少なくともドイツには多くの研究所がありますが、大部分は特定の分野に焦点を当てており、このように多くの環境研究分野をカバーしている研究所はありません。この国環研の特にユニークで明確な特性は、世界に広く伝えられるべきです。

(2) 国環研は基礎研究の実施に力を入れており、基礎科学の発展に重要な役割を担う

国環研の特徴の1つは、基礎研究の実施に力を入れている点です。現在、日本国内の環境研究機関は応用研究、政策主導研究を推進する傾向にありますが、基礎科学の発展に果たす国環研の役割は重要であり続けると信じます。基礎研究の発展を促進することに加え、そのような研究の重要性が外部に向けて伝えられ続けることも必要です。この点についても、その継続的進展を見続けたいと思います。

(3) 特定の統合的研究テーマの設定により、国環研は学際的連携を強化できる

多様な分野の研究者を連携する努力は、いくつかの面で他（の研究機関）よりも成功するかもしれません。研究機関としての能力の面から、統合的研究テーマの設定は国環研にとって重要だと信じます。例えば、持続可能性に関する研究や、地球規模の状況把握に関する研究のためには、多様な分野から研究者を集めることが必要不可欠です。そのような（統合的）研究テーマの設定によって、多様な分野間の連携を促進する可能性があると考えます。

(4) 学際的研究は国環研でも必要性が増すだろう

ドイツでは、環境研究の博士課程学生が様々な分野の教員から指導される傾向が多くなっています。学際的な視野がないと、あるいは学際的なチームの研究に基づいていない申請書では、研究費の獲得が益々難しくなっています。つまり学際的研究が標準となりつつあります。またドイツで増加するシンクタンクの影響で、研究がより学際的な体制へと徐々に移行しています。日本の環境研究分野においても同様な動きがあり、このような一環として、国環研はこの動きへの対応が求められるかもしれません。

(5) 研究成果を分かり易い情報として、一般市民や政策決定者、マスコミに伝えることは重要である

研究の成果やその関連性を分かり易い情報として、一般市民や政策決定者、マスコミに、伝えることは、私の大学でもまたドイツ国内でも重要だと考えられています。例えばドイツでは、政府が設置した環境審議会がこの役割を果たしています。この審議会に様々な分野の専門家が集まり、研究過程で出てきた問題、リスク、および将来重要になるであろう研究分野について討議します。これらの議論の結果は報告書に要約され、4年に1度政府に提出され、そしてマスコミにも取り上げられます。さらに、小規模ですがより焦点を絞った報告書が毎年数冊発行されています。この過程を経て、情報はマスコミを通じて一般市民に届きます。日本で同様な役割を担う審議会が設置されることも良い考えかもしれません。

(6) 研究コミュニティとしての人文・社会科学の重要性を伝え続けることも大切である

これまで経験してきたような人文・社会科学に対する研究資金提供の低迷は、世界的現象であると思います。応用可能な科学研究の範囲外のものは、実際の価値がほとんどないと評価される傾向にあります。これは誤りです。研究コミュニティとしての人文科学と社会科学の役割と重要性について、一般市民にアピールし続けることは重要です。

(7) 国環研キャンパスの資力・活力は少しの努力によってより効果的に強められるだろう、そして国環研の貴重な情報やデータは効果的に用いられ、積極的に伝えられるべきである

もう少しの努力で、国環研キャンパスの資力・活力がより効果的に強められ、また伝わるでしょう。例えば、研究者らが気軽に集まれるコミュニティスペースが必要かも知れません。また、研究所に来た外部の訪問者が一目で分かるように、壁面を使って国環研の研究成果を紹介し、アピールすることも良いアイデアかも知れません。国環研が蓄積してきた貴重な情報やデータが、より効果的に用いられ、積極的に伝えられよう、分かり易い方法での取組を見てみたいと思います。



Professor Miranda Schreurs

シュラーズ教授

Overview of research outcomes
of the Center for Social and
Environmental Systems
Research

社会環境システム研究センター
での研究説明



Explanation of activities of the NIES
Microbial Culture Collection

国環研の微生物系統保存に係る活動紹介

Group photograph after the
conclusion of discussions

会議終了後の集合写真

